

流星倶楽部 第二十六回公演 上演台本

昼下がりのミツバチ

作・大正まろん

演出・寺岡永泰

登場人物

好江（女）

井口（男）

風子（女）

高木（男）

八重（女）

竜児（男）

剛志（男）

好江の娘

井口の妻

好江の息子

井口家の息子

タクミ（男） 好江の息子であり、風子と竜児の兄でもある

かつては山だった斜面に、ドミノ倒しができそうな四角い団地が  
建ち並んだのは、三〇年以上も前。

好江 初めて所帯もって、ようやく手に入れた家がここ。……嬉しかったあ。何が嬉しいて、もう誰にも追い出される心配がないやろ。タクミは夜泣きがひどおてな、三人産んだけど、あの子が一番苦勞した。やっぱり元々弱い子おやったんかな。オツパイでもない、おしめでもない、何で泣くのかわからへん。ずっと泣いとう。それまで住んどった長屋は、壁が薄いから、両隣から文句言われて恐かった。あの子の口押さえながら、私も一緒に泣いとった。せやから、山の中に並んだ、この真っ白い団地見たとき、夢のお城に見えた。これからは全てがうまく行く思た。最初の亭主はな、サラリーマンやった。結構まともやろ。けどな、会社の女とデキてもうて、そっちに行ってもたんや。でも、私にはこの家が残った。実家なんか、とーの昔にあらへんし、私の居場所はここだけやった。二番目の亭主は、トラックの運転手。男前でなあ。けど、この家に入り浸るようになって、段々働かんようになってしもてん。それにしたって風子産まれた頃は、お金にいつも困つとった。タクミもまだ小さかったし、働きにも満足に出られへんやろ。明日食べるお米もないいう時もあつてんで。もう、どうなてもこないもならんいう時にな、私、車に轢かれてん。轢かれた言うたら大げさや、当たった。……ワザとやないよ。その人お金持やったから、入院費やら治療代やらようけ出してくれた。……神さんゆうのはホンマにおるなあ思たね。せやから私な、事故の後遺症で時々頭が痛あなるけど、エエねん。あれが無かったら、私ら家族、飢え死にしとったかもしれへんもんなあ。……なあ、ゴンちゃん、またなんぼか貸してくれへん少してエエねん。今月も苦しいて……。

井口がお金を出す。

好江 おおきに。ごめんなあ。

好江、起き上がり。

好江 シーツもう乾いとうかな……。 (井口に甘く) はよ仕事行かなアカンで。

フラリとベランダへ向かう好江。

井口は、玄関へ向かう。

眩しさに目を覆う風子、目を開けるとそこは一面のシーツの海。  
遠くに風子の母、好江が繕い物をしている姿が見える。

風子 お母さん。

シーツの海の間こうのベランダから、真夏の強い光が射し込む。  
逆光でよく見えないが、ベランダの手すりに腰掛た風子の兄がいる。

風子 お兄ちゃん……お兄ちゃん、あぶない、やめとき。

兄は、その声が聞こえていないのか、ベランダの手すりによじ登る。

-- まるで綱渡りをするように手すりをフリリ、フリリと歩く兄。

風子 アカンて、お母さんも言うて、お兄ちゃんが、お兄ちゃん、やめときって、落ちたら死んでまうって、あぶないって、なあ、あぶないって、あかん、やめてーな。……なに笑つとんよ、降りて、降りてよ、なあ、降りてってば！

兄は、驚いたように風子を振り返り、見つめる。

強い風がふいてくる。

兄は、鳥のように、両腕を広げ向こう側へ飛び立った。

呆然と立ち尽くす風子。

一人の男、井口が現れる。

風子は、我に返り、カバンからデジタルカメラを取り出し、周囲を撮影しはじめる。

井口 あんた。

風子 はい。

井口 見かけん顔やけど、この団地の人？

風子 なについて……あの、あなたは？

井口 （小声で）住人。

風子 はあ。

井口 しかも、あの事件のことやったら、ワシが一番よう知っとう。

風子 事件。

井口 知りたいやろ？

風子 事件て？

井口 はい。

井口は手を差し出す。

風子 え？

井口 ほらあ。

風子 なんですか？

井口 もう、すっとぼけてイヤヤわ。タダで渡せる情報ちやうっちゅうこっちゃ。

風子 あの、私、結構ですから。

井口 あっそ……ま、氣い変わったらいつでも電話して。

井口は、チラシを差し出す。

井口 お姉ちゃん別嬪さんやから、別嬪さん割引しとくさかいな。あ、あと、まとまった金が、必要な時も声かけたってや。ワシ、この辺りじゃ、ホトケの井口いわれとんねん。取り立てン時でもやさしいスマイルが売り物です。

井口は「ニツ」と笑いを残し去っていく。

風子 ……。

風子はもらったチラシを丸めて捨てようとする。

鏡に日光を反射させたような光が風子を捕らえる。

風子は、声の主、高木の姿を探す。

高木が現れる。

高木 車、苦勞して駐車場に入れて、ふっと見たらおらへんし、

風子 ごめん、なんか、氣いついたらここに來てた。ここやで、このベンチにモモレンジヤーのピンクの衣装着たお兄さんが座ってお弁当食べてはってん。他の青レンジヤーとか、緑レンジヤーもおったけど、モモレンジヤーいうたら女の人やと思ってるやん、夢、持ってるやん。そやのに、中身は男の人やってん。お兄ちゃんかなり衝撃やったみたいでさ、

高木 携帯なんべんかけてもでえへんし、めっちゃ捜してんで。

風子 え、そやったん？……（携帯を確かめ）ホンマや。ごめんなあ、ゴメン。

高木 ……よし、許す。

風子 うっす！

高木 家、どこなん？

井口が現れ、二人を見ながら公園を横切っていく。

風子 あそこ。（と指す）……一番上の右から三つ目。

高木 （窓を数える）右から一、二、三。

風子 あのベランダから……。

高木 うん。

風子 ……案外、高ないんやな。

高木 高ないって団地が？

風子 私の中の記憶やと、すっごい高い建物やってんけど。案外小さい。

高木 じゃあ、風ちゃんが大きくなったんや。

風子 （身長）高校の頃から変わってへんよ。

高木 ま、大人になったってこっちや。

風子 そうやったたらエエねんけどさ。……あ、見て。

高木 なに？

紙片は、コヨリ状にヒネられ、竹とんぼのような形をしている。

風子 ……なにそれ、マジック？

高木 マジックで（笑う）。

風子 え、なんで？

風子、もう一度拾った紙片を見る。人の形はしていない。

風子 変なの。

高木 どないしたん。

風子 私が拾った時は人の形しとってん。……ホンマやねんで。

高木 ま、そんな事もあるて。

風子 馬鹿にして。

高木 ちゃうて、風ちゃんの目にはそう映ったんかもしれんってな。

風子 またまた、わかった振りして。

高木 どないせえっちゅうねん。

風子 ……ほんまや。どないせえっちゅうねん。な。

高木 家、行く？

風子 ここまで来たし……、今日は帰えろかな。

高木 それでもエエで。ペーパードライバーの訓練もかねて、その気になるまで何辺でも

運転手やったるから。

風子 ……行く、行くに決まっとうやん。

高木 そんな無理せんでもエエやん。

風子 行ってくたら、行く。行かなアカンねん。

高木 ほな、いこか。

風子と高木、去りながら。

風子 あ、なあ高木さん

高木 ん？

八重 あんたや、それは。この亭主泥棒、色キチガイ。

好江 なんとでも言い。男が浮気すんのは、あんたのせいでもあるんや。

八重 アホないちやもんつけんというて、まさか、あんたがそんなことするとは夢にも思わなかったわ。

好江 もっと大事にしたたら？そんな悪い人ちゃうやん。

八重 なにを抜け抜けと。

好江 ……ゴンちゃん、どこ行ったんやろ。

八重 そりゃ居られへんやろ、こんなところに。

好江 私の家はな、古いもんばっかしやけど、そんな汚くない。ゴンちゃん、埃アレルギーや、言うからきれいに掃除しとんねん。

八重 ウチが言うてんのは状況。あんたが言うてんのは環境。

好江 ああ、せやねー。

八重 ほんまに、あんたって人は……。ウチの人もアレやけど。二人とも絞め殺してやりたいわ。

好江 その気持ちようわかる。

八重 わかってたら……はっ（何をしゃあしゃあと抜かしてねんの意）。ゴンちゃん……ゴンちゃんて呼んでんの？

好江 まあな。

八重 なにがゴンちゃんよ。ああ、もう、ああもう、なんかムカツイテきた。

好江 ゴメンて。

八重 ああ、もう、やめや。ウチ、帰る。

好江 なに言うтон、まだ勝負ついてへんやん。

八重 あんたな、

好江 ……竜児、竜児。

隣室から、竜児が顔を出す。

竜児 なんや。

好江 ビール。

竜児 アホか、ビールくらい自分で取りに行け。

八重 あんたら、そのコンビニまで行ってビール買ってきて、なんか好きなお菓子買ってもエエから。

竜児 お菓子で、おばちゃん、俺らガキちゃうんやから。

好江 何言うとんよ、テレビゲームばかりしてるクセに。

竜児 プレステは大人かてするんじゃ、アホ。

好江 あんたエエ加減にしいや。親に向かってアホ言うな、ドアホ。

剛志 行ってくるわ。

竜児 はあ？

剛志 母さん金。

好江 ああ、私が出す。

八重 やめて、あんたに酒めぐんでもらうほどウチは落ちぶれてへん。

剛志 はいはい。どっちも適当に頂だい。

好江と八重両方からお金を受け取る剛志。

竜児 マジで行くん？今めっちゃエエとこやのに。

剛志 じゃあ、ゲームしとったら？

竜児 なんでや、コンビニ付き合うつて。

剛志 ゲームしたいんやろ。

竜児 いや、せやからな、あんなババアの言う事聞くんがム力つくやろ。

剛志 そうか？

などなど言いながら、二人は玄関から出て行く。

八重 ……もうエエわ。

好江 ちょっと早よ賭けてーや。

八重 もう、なんかどうでもエエ。

好江 降りるんか？

八重 ウチ疲れた。

好江 もう、いきなりなんなんよ。塩で揉んだキュウリみたいにしんなりして。



八重 こんな近所に住んどって。互い行ったり来たりしてんのに、バレン方がおかしいやんか。普通アレやろ、理性みたいなもんが働くやろ。そんな犬や猫ちゃうんやから。そんなにシタいんやったら、他に「コマシ」な男なんぼでもおるやろ。なんでウチの人なんよ。

好江 そんなにゴンちゃんが好きやったら浮氣の一コやニコ許したりいや。

八重 好きちゃうわ。

好江 せやったら、別にもうエエやん。

八重 そんな問題ちゃうやろ！ツレの旦那に手出すか普通。それがウチはわからんって言うてんの。

好江 わからんでエエやん。あんたと私はちゃうんやし。

八重 あんたと私っちゅう個人的な話ちゃう。一般常識や。やったらアカンことはアカンねや。

好江 あんた、いつもゴンちゃんのこと、サイテー、ぐうたら、粗大ゴミでこき下ろしてたやんか。私は、あんたがイランて言うたもんを捨てあげただけや。

八重 誰が、いつ、イランなんか言うたんよ。

好江 さっきのさっきかて、あんたゴンちゃんと別れる言うったやん。

八重 ウチの亭主はペットちゃうんよ、そないに簡単なもんやないやろ。

好江 じゃ、亭主の愚痴なんか言わんとき。

八重 ウチが愚痴ったから、ウチの亭主と寝たいうん？もう、どんな理屈やねんそれ、あんた普通やないよ、頭おかしいわ。

好江 ああもう、やめじゃやめじゃやめじゃ。

と、トランプをブチまけ、机のものをぐちゃぐちゃにする。

八重 ちよつと、あんた、なにすんねんな。

好江 おかしいんは、とうの昔からわかつとうわ。わかつとんのにどもならんから、こんなシケた場所で、シヨボシヨボ暮らしとんねん。私がどっか行く。あんたともゴンちゃんとももう会わへん、それでエエんやろ。そうする、そうしたるわ、アホ。

好江、靴下のまま、外へ走って出て行く。

剛志 お前にやる。

竜児 四百円が俺で、三百円がお前か？

剛志 七百円全部お前のもんや。

竜児 ウソ、マジで？マジでくれんの。

剛志 たかが三百円くらいで、そないに嬉しそうにすんなや。

竜児 三百円ちゃうで、三百五十円やで。

剛志 ああ。

竜児 やったサンキュー。

剛志 ……平和やのう。

竜児 え、俺か？

剛志 なんとなく。

竜児 やっぱ、俺やろ？

剛志 せや、お前も含めて、平和ボケしとう。

竜児 ごめん。

剛志 なんで謝るねん。

竜児 なんとなく。

剛志 なんとなくって何や。

竜児 ……俺らどうなんのかな。

剛志 別にどもならんやろ。

竜児 せやけど、あいつら、なんかややこしい事なっとうし……。

剛志 暇やねん、暇やから、浮気なんかしよるねん。

竜児 ウチのオカン、どうしようもないねん。見境ないっちゅうか。……もう、なんかこ  
んなんばかりや。

剛志 しゃあない、俺の親父も、同じようなもんや。母さんもなんやかんや言って大騒ぎ  
しよるけど、結局別れへんねん。あいつら依存しおとうねん。

竜児 なんや依存しおてるて。

剛志 持ちつ持たれつ、ちゅうやっちや。

竜児 ようわからん。

剛志 つまらんのう。

竜児 ごめん。

ろ。

竜児 ……ま、そうかな。

剛志 平和っちゅうぬるま湯中にどっぷり浸かって、シブキ掛け合ってキヤツキヤ言うて楽しんでるだけやねん。そのぬるま湯が下から熱せられてんのも氣い付かへん。アホやと思わへんか？

竜児 平和って悪いことなんか？

剛志 ちゃうわ、平和やと思いい込まされてるだけなんや。

竜児 ……。

剛志 (自分の目を覆い) こんな状態なんや、俺らの状況は。

竜児 目、見えてるやん。

剛志 ……もうエエ忘れてくれ。

## 間

竜児 な、どんな奴やと思う？

剛志 磯崎んちのポストに鳩の死骸突っ込んだ奴か？

竜児 うん。

剛志 自分、嬉しそうやな。

竜児 んなことないよ。

剛志 ガキのおふざけやろ。

竜児 そうかな、次はもつとエスカレートするかもしれへんで、どうする、猫の死骸とか入ってたら。

剛志 猫はアカン。

竜児 アカンて？

剛志 猫は可愛いから、アカン。そんな事する奴は、ボコボコにしたる。

竜児 ほんなら、犬やったらエエんか？

剛志 犬はポストに入らへんやろ。

竜児 あ、せやな。

## しばしの間

竜児 俺やない（頭を抱えしやがみこむ）。

井口が現れる。

井口 剛志。

剛志 （竜児に）親父や。

竜児 （しやがみこんだまま）。

井口 こんなトコで何してんねん。

剛志 お使い。

井口 そっちはどんな感じや。まだモメてるんか？

剛志 オレはスパイちゃう。行こ、竜児。

井口 竜児君、気分悪いんか？

剛志 そりや、気分悪いやろ。親父の顔なんか見たくないんや。

竜児 （しやがみこんだまま）違う、俺、違う。

井口 うんうん、ありがとうな。なんでしやがみ込んでんねんや？ アリでも探してんのか？

剛志 竜児、もう分かったて。

井口 あ、あの事件。マスコミが嗅ぎつけたらしいで。

竜児 え。

井口 ここに男女の怪しい二人連れが来てたんや。ここでな、女の人がかうして、写真撮ったりな。一人はひよろんと大きい兄ちゃん、なんや団地指差して話してたから、撮影の段取りとかかな。インタビューとかされたりするんかなあ……なんやオモロなってきたなあ。

竜児、立ち上がり、フラリと去る。

剛志 竜児。

竜児 先、戻ってる。

剛志 おう。

井口 なんてったって、鳩の死骸つまみ出して、警察呼んだんワシやからな。ようあんな

井口 嫌やない、頼むて……剛志。

剛志 知らんて。

井口 ワシ、好江さんと結婚しよか、思てる。

剛志 は？

井口 つまり、ママと別れようと思てるんや。

剛志 あっそ。

井口 もちろん、お前とはずっと親子のまんまや。

剛志 ……。

井口 ええか？

剛志 ……。行くわ。

井口 ママの気がおさまったら、電話、頼むわ。

剛志 ……。

剛志去る。

五

五〇三号室。八重と風子と高木が居る。

高木 鳩の死骸、ですか？

八重 そうなんよ。犯人はこの団地の人ちゃうかって、言われてる。

高木 なんですですか？

八重 そのポストに鳩が入ってた家って、あっちの住宅街の家なんよ。大きな家。

八重、携帯電話のリダイヤルをかけてみる。

八重 アカンわ、電源切ってる。ほんま、どこ行ったんやろね。……お茶くらいだしてあげたいけど、他人様の家やしね。

風子 すみません。私、入れます。

八重 あ、そんなつもりで言うたんちゃうよ。

インスタントコーヒーのビンを持ち。風子現れる。

風子 インスタントコーヒーでエエかな？

八重 ウチはイランからね。

風子 はい。高木さんは。

高木 濃い目、ブラックで。

風子 うん。

八重 あ、ちよっと、そのコーヒー見せて。

風子 え、はい。

八重 なんでブレنديヤの。

風子 はい？

八重 ネスカフェでないとかカンの。しかもゴールドブレンドってちよっと高いやつ。

風子 すみません、安もんで。

八重 ちゃうの、ウチの人ブレنديとか他のコーヒーは、マズうて飲まれへん言うていっこも使こてくれへんの。なんで？なんでネスカフェちゃうんよ。ここん家やったらブレنديでも許せるわけ？

風子 ……、コーヒー入れましょか？

八重 （気落ちして）ウチは、エエわ……。

風子、再び台所へ。

高木 あの、先が見えてるって？

八重 え？

高木 この団地はもう先見えてるしって、言うてはったでしよ、今。

八重 ああ……。

高木 どないしはったんですか？

八重 ……年寄りばかり。

高木 住んではる方？

八重 そう、そやのにエレベーターないでしよ、階段キツイでしよ、駅から遠いでしよ、病院ないでしよ、近所のショッピングモールも潰れかけやし。パラパラ、パラパラ人

外壁かて塗りなおす、これからキレイになるって言われたから引越してきたのに……な  
んでこんなトコ選んでしもたんやろ。

高木 風ちゃん。

風子（声） はい？

高木 なんか手伝おか？

風子 ううん、大丈夫。

八重 ……あんた、知ってんの？

高木 ここの長男さん、自殺しはったの。

高木 はい。

八重 子供、三人ともお父さん違うんよ。

高木 はい。

八重 皆が言うてるほど、悪い人やないで思て、好江さんとお付き合いさしてもうてきた  
けど、やっぱりやめとけばよかった。

高木 あの……

八重 あはは、ごめんね、彼女さんもんね。

高木 彼女……いやそうやなくて、僕、母も弟も自死で亡くしたんです。

八重 じし？

高木 自ら死ぬって字を書きます。

八重 自殺と何がどうちゃうの？

高木 解釈が違うんです。自殺いうんは、自分の意志で死を選び取ったという考えに基づ  
いた言葉です。自死は、自分で命を絶ったことには違いがないんやけど、追い込まれ  
て、ホンマは生きたかったのに、他に選択肢がなくなってしもて、死なざるをえな  
かったと。

八重 ようわからんけど、あんたのお母さんと、弟さん、二人とも、その、自分で死な  
はったということやろ、なにがあったん？

高木 知ってますか？自死しはる人って、いまは交通事故よりも多いんですよ。

八重 え、そうなん？

風子現れる。

高木 言わんでエ工事、ぎょうさん口走ってしもた。

風子 そんなことないよ。

高木 うん。

風子 ……ウチの食器な、

高木 ん？

風子 裏が全部汚れとんねん。

高木 食器の裏が汚れてる？

風子 母さんいっつも、チャチャツて表だけ適当に洗う、だから、裏に汚れが溜まっ  
てい

高木 このコップも？

風子 よう洗ったよ。

高木 ううん、その汚れてどんなかな思て。

風子 やっぱり、母さん、いっつも変わってへん。

高木 食器の裏で判断するか？

風子 うん。

高木 見せてもらってもエエ？

風子 え……うん。

風子、台所へ向かう。

竜児が帰ってくる。

竜児 ……お前、誰や。

高木 ああ、ええと、あの、その。た、高木です。

竜児 なにしとんねん？

風子 ……竜児？

竜児 ……。

風子 お帰り。こちら、高木さん。お姉ちゃんのお友達。

竜児 ホンマに、ただの友達か？

風子 ああ、うん、友達、友達やんな。

高木 ああ、うん。



竜児 学校て？

風子 なにトボけてんの、調理師の学校。

竜児 行ってへん。

風子 え、やめてしもたん？

竜児 どうでもエエやろ。

風子 良くないよ、ホンマに辞めてしもたん？それとも最初から行ってへんの？入学金、母さんに言われて送ったんやで。あれ、どないしたん？

竜児 ……ちよう、どいてくれ。

風子 竜児。

竜児 人に酒買うて来い言うて、帰ったらおらへんねんもんな。

竜児、ビールを冷蔵庫に入れに行く。

風子 行き先、心当たりあるん？

竜児（声） マーチ。

風子 え。

竜児（声） 国道沿いのカラオケスナック。どうせ金持って迎えに来いって電話かかってくんねん。

風子 竜児。

竜児、戻ってくる。

竜児 なんよ。

風子 姉ちゃんと、一緒に暮らさへん？

竜児 は？

風子 学校も、行き。姉ちゃん、正社員になったし、二人細々とやったら、暮らせるし。

竜児 ……いらんわ。

風子 何で。

竜児 俺、お前みたいな事したないねん。

風子 私みたいな事って？

入れ違いに、剛志が入ってくる。

剛志 竜児。

竜児 ……。

竜児去る。

剛志 あのコレ。

高木 え、あ、はい。

コンビニ袋を高木に渡し、竜児を追いかける。

高木 ビール……。冷蔵庫、入とくな。

風子 うん。

高木、台所へ消え、また戻ってくる。

風子 最初っから、うまく行くなんて思てへんかったよ。

高木 せやな。

風子 辛いのも覚悟しとったよ。

高木 せやせや。

風子 でも、竜児に、あんな事言われると思わへんかった……。

高木 辛いな。

さっき持ってきた皿の裏を見せる。

風子 ほら、黒ずんでるやろ。

高木 ああ、言われてみたら。でも僕やったら気にならへんな。

風子 うそお。私は気になって気になって母さん洗ったもん、洗い直してたら、「うちのやることに文句つけんな」って髪の毛持って引きずり回されんねん。

高木 恨みだけやるか。

風子 殺すぞって言うたんよ。

高木 せやけど、あんまり本気で言うたようには聞こえへんかったで。風ちゃんが、これからよう話し合っついていったら、竜児君の態度もちよっとずつ違って来るんちゃうか。

風子 そうかな……。

高木 何。

風子 ……竜児、お兄ちゃんソツクリやった。おかしいな、お父さん違っのに。

高木 笑われへん、笑われへん。

風子 竜児、お兄ちゃんが死んだ時と同じ歳や。あの子、大丈夫なんやるか……。飛び降りてしもたお兄ちゃん見てしもてん。「お兄ちゃんの名、耳から血い出とったで、ようけ、血い出とった」て異常に興奮してた……。小さい子おが、そんなん見て大丈夫なんやるか、後で影響とか、ないんやるか。あの子、すごい苦しんでるんかもしれへん。早く、なんとかしたらな、あの子まで、どうにかなってしもたら私、

高木 ……。

高木、立ち上がり、ここではない風景を見ている。

風子 高木さん。

高木 ううん。なんでもない。

風子 ごめん、私……。

高木 ちやう、風ちゃんのせいやないから。

風子 ごめんな、こんな事につき合っつてもうて。

高木 何回も言うてるやる。僕んとは、もうやり直せる家族、おらへんから。風ちゃんと一緒にこうしてる事で、整理をつけさせてもうてるねん。あ、でも邪魔な時はちゃんと言うてな、家族だけの方が話しやすい時もあるから。

風子 うん。

高木 お母さん、探しに行くか？

風子（声）でも、どこに居るかわからんし。

高木 弟さん、国道沿いのスナックで言うてへんかった？「ロンド」ちやうわ、なんやっ たっけ。

風子 あ。

井口 あ、記者の姉ちゃんらやん。自分らここで何しとん。

風子 実家です、私の。こっちは友達。

井口 ほな、あんた、好江さんの娘さんかいな。

風子 はい。

井口 じゃあ、あんたがマスコミの人？

高木 いいえ。

井口 ええ！なんや、ちゃうんかいな、なんやがっかりやな……。

高木 そんなに僕で、マスコミ顔でしょうか？

井口 え。

高木 いや……なんか今日は皆さんそうおっしやるんで。

井口 ははは、ま、気にしな。

高木 はあ……。

井口 ほいで好江さんは？

風子 出かけてます。

井口 あ、そう。ちよっとは落ち着いたんやろか。

風子 あの……ウチの母、お金借りてるんですか？

井口 ワシから？

風子 はい。だって……（チラシを出す）さっきこれ。

井口 ああ、個人的に、ちよっとばかしな。

風子 え。

井口 いや、いや、それは別にビジネスとちゃうから。なんちゆうか、ボランティアっち  
ゆうか、ボランティアはおかしいな。

高木 井口さんって、さっきここに来てた女の人の旦那さんですか？

井口 ああ、そうそう。

高木 奥さん家に帰りましたよ。

井口 そうそ、せやから逃げてきたっちゆうかね、

高木 はい？

井口 危ないところでしたわ。ハハハハ。

風子 家に居る方が、よっほど安全ですよ。

必要なんや。

八重（声） 誰に、何が必要やて。

井口 あちやあ……。

八重が姿を現す。

井口 ワシ、戻らへんからな。お前が、何て言おうが、もう、ワシの意志は固い。

八重 （風子に）携帯、忘れてしもてな。

八重、自分の携帯電話を探して

井口 戻らへんからな。

八重 あった、あった。

井口 離婚届は、書いてポストにでも入れとけ。

八重 あんた、帰るで。

井口 帰るで、どこに帰るねん。ワシの家はここや。

八重 好江さんと話したん？

井口 ……それは、これからや。

八重 大笑いやね。あんたいう人は、どんだけお人好しなんよ。

井口 おう、なんとでも言え。

八重 好江さんは、あんたの事なんか何とも思てないんやから。

井口 はいはいそうかそうか。

八重 誰でもエエんよ、あの人は、男やったら。

井口 おい、娘さんおる前でなんちゆう事言うねん。

風子 別にかまいません。

井口 エエことあるかい、親やろ、産んで、育ててくれた人やろ、なんで味方になったらへんねん。あの人がない苦労してあんた育ててきたか。好江さんの身になって考えてみた事あるんかい。

風子 考えようと努力はしてます。……あの人は、大きな子供です。精神が未熟です。好きになつた男は自分の保護者やと思てます。甘えられるのがキライです。宿題はしま

風子 ……。

井口 行くで。

八重 どこに。

井口 近所のサ店かどっか。

八重 は？

井口 娘さんの目の前で、言い合いしてたら、気の毒やろ。

八重 気の毒なんは私やわ、何回目よ。何回こんなこと繰り返したら氣い済むんよ。

井口 今回は、ちやう。

八重 何がちやうんよ、いっつも、いっつも。他人さんなんかどうでもエエ、ウチの身にもなってよ。今までどれだけアンタのこと助けてきたと思てんのよ。自分で再就職先もよう見つけやんと。ウチの親に借金して、ようようはじめた金貸しの仕事かて、満足に回収もできん。ウチ情けないわ、何でこんな目に会わなアカンのよ、ウチ親に何て言うたらエエんよ。

井口 顔みたら、親子そろて、文句ばかり、ぶつくさぶつくさ言いやがって。そんなもんな、感謝の気持ちものなるわ。

八重 感謝、感謝やて、元々、これっぽっちも感じてへんくせに何言うてんの。

高木 あの、僕らちよっと、出てきます。

井口 どこに……。

高木 そこら辺を、ぐるっと。ゆっくり話してください。

井口 グルツとな、グルツとワシもしたいなあ。ハハハ。

八重 アホか。

高木 風ちゃん、行こ。

風子 え、ああ、うん。……あの。

井口 はい。

風子 奥さんでもエエんですけど、母の携帯電話の番号、教えて頂けませんか？この家、電話止まってるみたいで……。

井口 あ、はいはい。

八重 あんたは出さんでエエねん。（携帯を取り出し）〇九〇の……。

風子 ありがとうございます。

男グセかて、エ工事あらへんやんか、

井口 八重。

八重 一体何人の男と寝たんやろね。長男かて、好江さんのせいで死んだん、

八重の両肩を強く掴み。

井口 もうやめとけ。

八重 あんたホンマに遊ばれてるだけやねんで。ウチ、好江さんから聞いてんから。好江さんあんたの事なんか、なんとも思てへんねんで。そんなんわかってんの？

井口 そういう言い方しか知らんねん。そういう出会いしかあの人にはなかってん。でもな心根は、素直なエエ人なんや。お前も、せやから二年も仲良うしてきたんやろ。わかるやろ。

八重 ……わからん、わかりたない。

井口 八重、好江さんを恨まんといてくれ、ワシら、もう夫婦としてアカンかった。恨むんやったら、ワシを恨んでくれ。

八重 ウチは許さへん、あんたも、好江さんも、許さへん。許さへんねんから……。

泣き崩れる八重。途方に暮れる井口。

## 六

公園。竜児、地面に膝をつき座っている。

剛志は竜児を追いかけて走りこんでくる。息が落ち着いてから、ベンチに腰掛ける。

剛志 どないしてん。さっきの事気にしてんのか？俺、誰にも言わへんで。

竜児 ……磯崎のアホ、俺が兄貴を殺したって言いふらしよったんや。俺が兄貴をベランダから突き落としたって。中学ん時も、高校ん時も、専門学校行った時も……あいつなんで大学行かへんねん、金持ちのクセに・

剛志 磯崎、なんでそんな事言いふらすねん。

竜児 知らんわ。小学校まで友達やった。学校も一緒に行ってた。いつも磯崎の家行った

竜児 俺、頭、おかしいのかな。

剛志 普通はそないキシヨイ事せえへんけど、お前の経験したことは普通やないから、お前の頭は、範疇やと思うで。

竜児 へ？

剛志 まあまあフツーちゃうて言うたんや。

竜児 そうかな。

剛志 あ、せや、磯崎んち引越しするねんで。

竜児 え。

剛志 お前が鳩入れたせいちゃう。親父さんの会社、ヤバイらしい。

竜児 ……。

剛志 ざまあみろってか？

竜児 いや……。

剛志、竜児に近づき、横に座る。

剛志 竜児、聞いてエエか？

竜児 ん。

剛志 兄ちゃん、何で死んだん。

竜児 ようわからん。就職した会社でボヤ騒ぎが起きて、放火の犯人と間違えられてん、ほんまに兄貴がやったんとちゃうかってんで。

剛志 おう。

竜児 母さんと、姉ちゃんと、俺、警察に会いに行ったん憶えてる。無実がわかって釈放されたけど、結局、会社辞めてしもて、酒飲んで暴れるようになって、そこに落ちた。

剛志 落ちた。

竜児 自殺なんか、事故なんか、ようわからんかった。

剛志 なんで？

竜児 ベランダの手すり乗って、フラフラ歩いてたんやて。ま、自殺行為や、アホやで…  
…

剛志 ふーん。



竜児 え……。

剛志 そんな顔すんなや。

竜児 けど、剛志、シヨックちゃうん。

剛志 シヨックやけど、結構。

竜児 シヨックやったら、もっと、シヨック受けた顔せな。わかりにくいで。

剛志 生まれつきじゃ、アホ。

竜児 ふーん。

剛志 けど俺、家出るし。

竜児 家出すんの？

剛志 ちゃうわ。一人暮らしして、目一杯働いて、金貯めんねん。

竜児 そいで？

剛志 そんでぬるま湯から出て行くねん。

竜児 って？

剛志 ああ、もう、抽象的な概念や。

竜児 抽象的で、ハッキリしてへん事やる？

剛志 せやハッキリしてへん。けど、戦うねん、戦う場を探しに行くねん。

竜児 戦争か？傭兵にでもなるんか？危ないで。

剛志 いちいちアホやな。

竜児 賢いんやったら、アホにもわかりやすうに喋れや。

剛志 ……せやな。せやから……チンパンジー森に帰したり、砂漠の拡大を防いだり、サングラスを守ったり、ブナの木い植えたり、そういう戦いや。

竜児 なんや大変そうやな。

剛志 俺もなにがしたいかわからん。けどその辺りのことがやりたい。

竜児 うん。……あ、ハチや。

剛志 え、ハチ？

と、慌てて立ち上がる。

剛志 どり。

竜児 そこ、そこ。

剛志 ハチ育ててるんやなくて、ハチミツ集めてねんやろ。

竜児 な、知ってるか？

剛志 ん？

竜児 ミツバチのこと。

剛志 いや。

竜児 ミツ集めてるハチ、全部メスやねん。オスのハチはミツ集めも、巣の掃除も、なんにもせえへん。春になったら競い合って女王蜂と交尾すんねん。交尾できたオスはすぐに死んでまう。交尾できへんかったオスはな、巣の中でブラブラしてんねんけど、秋になってエサ、少なくなったら、巣から追い出されて死んでまう。……お前はどっちがエエ？

剛志 え？

竜児 お前がオスのハチやったら、どっちがエエ？って昔、兄ちゃんに聞かれたことがある。

剛志 どっちって聞かれてもなあ。

竜児 (ニヤニヤ)

剛志 なんやねん。

竜児 剛志より知ってることあった、思て。

剛志 はいはい良かったな。

竜児 俺はヤツテ死にたいな。

剛志 でもヤツタら即行で死んでまうんやろ。

竜児 秋までコケにされながらヨロヨロ生きてたってしゃあないやんけ。

剛志 あ、なんか、お前が変なこと言うから……。

剛志、腰を引いて立ち上がる。

竜児 (笑って) お前、アホか。

剛志 ウツソプー。

じゃれあう二人。

風子と高木が現れる。

風子 会って、色々話したい。

竜児 色々って。

風子 これまでの事とか、これからの事とか。

竜児 ……国道出て、右。チャリで二十分くらい。

風子 わかった。行ってみる。

竜児 ……歩いて行くん。

風子 ううん、高木さんの車で。

竜児 そ。

風子 ありがとう。

竜児 別に。

風子、高木去る。

剛志 どうする、ゲーセンでも行くか？

竜児 いや、ちょっと用事ある。

剛志 磯崎んところ行くんか。

竜児 ……またな。

剛志 一人で大丈夫か。

竜児 ……おう。

竜児と剛志、別々の方向に去る。

ゆっくりと夕方になってゆく。

七

五〇三号室。

好江がソファーに横たわっている。

風子は、母の靴下を脱がせてやる。

好江が、少し目を開ける。動きを止める風子。

好江 ……ありがとう。

好江 水。  
風子 水な。

風子、水を取りに行く。

好江 ああ、頭痛いわ。

高木 大丈夫ですか？

好江 ええと、あんた何て言う人やったかな。

高木 高木です。

好江 あの車、あんたのか？

高木 はい。

好江 ええなあ、どこへだって自由に行けるもんなあ。

高木 車あっても、そんなに自由ちやいますよ。

好江 ふーん。

風子、水を持ってきて、好江に渡す。

風子 はい。

好江 ああ、頭痛いわあ。

風子 飲みすぎや。

好江は水を飲み干す。

好江 そんな飲んでへんよ。(水)もつと頂戴。

風子 え。

好江 ウチとこの水や、ケチケチせんとはよ持ってきて。

風子 あ、うん、水おかわりね。

風子、再び台所へ。

風子 はい。

好江 携帯が無いねん。

水を飲む好江。

風子 私、お母さんが携帯持つてるなんて知らなかったわ。

好江 今時、携帯くらい誰でも持つてるよ。

風子 家の電話は？何で止まってんの。

好江 携帯あったら、イランやろ。

風子 携帯の番号知らなかったら、ここにどうやって連絡入れるんよ。

好江 頭痛いのに難しい事言わんとって。

風子 なんも難しい事言うてないやろ。

好江 あんたから連絡してくる事なんかないやろ。必要ないやん。

風子 ……そやね。

好江 もっと愛想ようできへんの、うっとおしい顔して。

風子 ……。

好江 高木さん、あんた携帯持つてる？

高木 あ、はい。

好江 ちよう、かけてみて。番号言うから。

風子 無理やって電源切ってたから。

好江 え。

風子 井口さんの奥さんに、番号教えてもうて、母さんに何べんもかけてん。せやけど繋がらへんかったてん。

好江 せやったら、最初っからそう言うたらエエやろ。「携帯持つてるなんか知らんかった」とかって、何でそんなイヤミ言うんよ。

風子 ……せやね、最初から、そう言うたら良かったね。

好江 ほんま気分悪いわ。ごめんな高木さん。

高木 お母さんの事、風子さんはものすごく心配してたんですよ。

好江 ああ、そう。

高木 背負って五階まで連れて上がったんです。

好江 やっぱり宗教や、娘まで、私を食いもんにするんや。出て行け、今すぐ出て行け。  
風子 母さんやめて、違うって言うとうやろ。

高木 風ちゃん、お母さんも酔うてはるし、今度にしよ。

好江 そんなUFO研究会みたいなんに入ってる人、二度と来てほしくない。

風子 UFOなんか研究してへん。NPO法人、非営利団体のことや。

好江 なんでそんな怪しいとこの人が家に来るんよ。

風子 怪しくなんかないよ。グリーンワークいうのんはな、私やったら、お兄ちゃんが死んだことを、ああかなこうかな、言うて話したり、色んな人の知恵かりて考えていく事やねん。高木さんには、私が無理言うて、ここに付いてきてもうたんや。

好江 ああもう、そんなややこしい話聴きたない。

ピンポンとチャイムの音

高木 変な宗教の勧誘とか、何かを売りつけに来たんちゃう言うことは、わかってもらえ  
ました？

好江 聞きたくない言うたら聞きたくない。

風子 お母さん。

好江 しつこい、ピンポン鳴っとうやんか。

好江、フラリと立ち上がる。

風子、玄関に行こうとする。

高木、好江のお尻の下に敷かれてる携帯を発見する。

高木 あ、携帯。

好江 え。あ、ホンマや。

井口（声）こんばんは、宅急便です。

井口、ダンボールを持って登場する。

井口 あ、あんたらまだ居ったんかいな。……好江さん、ワシ、家出てきてん。

好江 あんた、アホちゃう。そんな自分の家庭壊してまで、こんなトコに来たらアカンやろ。

井口 ようよう考えた結果や。

好江 八重さんと別れたいからって、家に転がりこむんはやめてんか。迷惑じゃ。

井口 それは、ちゃう。ワシは、好江さんと、この先の人生一緒に生きていきたいんや。

好江 どのつてもこいつも、調子のエエ事言うたって、私は、騙されへんからな。

井口 なんで騙すねん、ワシ、好江さん騙してどんな得があんねん。

好江 私はな、あんたの事、便利なおっさんと思っただけかと思っただけで、言ったら、金づる、金づるやねんぞ。私はそんな女やねんぞ。わかつとんか、お！

井口 そんな事いっこも思っただけや。

好江 ……。

井口 好江さん、ワシの事嫌いか？

好江 浮気する男なんか大、大、大嫌いじゃ。

井口 そんな殺生な。

好江 アホお、帰れ、帰らんかい。

井口 帰らへん。

そこいらへんの物を投げつける好江。

好江 帰れ、帰れ、帰れ、帰れ、アホ。

風子 お母さん。

井口 帰らへん、帰らへん、絶対に帰らへん。

好江 ……ゴンちゃん……。

言葉とは裏腹に、井口に駆け寄る好江。

ヒシと抱き合う好江と井口。

井口 ホンマ複雑なお人やな。

間

の歳になってアホやと思うやろ。今までそんなん全然、自分でもようわからんかった。でも、そうやねん。私を見て欲しい、私としゃべって欲しい。私が、これからちゃんと生きていく為に、その為に、色んなこと話したい。

間

好江 ここは、あんたの家でもあるんや。来てもエエとか聞かんでエエやん。  
風子 うん。

風子と高木、去ろうとする。

好江 ありがとう。色々。

風子 ……。

高木 お母さん（泣く）。

風子 高木さん……。

高木 ああ、ゴメン、アホやな僕……すみません、お邪魔しました。

井口 氣い付けて。

高木、逃げるように去る。

好江 早よ、行ったり。

風子 うん。

風子も去るが、すぐに引き返してくる。

風子 井口さん……。

井口 はい。

風子 玄関の前に、置いてあった。

井口に手渡されたのは、ネスカフェゴールドブレンド。



井口 トイレ、トイレまで我慢できるか？

などなど言いながら、井口は好江をトイレへ連れて行く。

八

公園。八重がブランコに乗っている。

剛志がやってくる。

剛志 母さん。

八重 はい。

剛志 なにしてんねん。

八重 なにて、ブランコ乗ってんねん。

剛志 そんなん見たらわかる。……カレー、焦げてもうたで。

八重 あ……。

剛志 大丈夫、上の方は全然食えるし。

八重 あーあ、やってもうた……。

剛志 大体、二人分やのに、なんであんなに仰山作るねん。

八重 ……見とってん灯り。

剛志 何。

八重 窓の灯り。うっとこの家も、他の家も、あっちの住宅街もこっから見てたら同じや。

剛志 同じて何が。

八重 お父ちゃんおらんでも、他の家の灯りと見劣りせんくらい、あったかいなあ。

剛志 そりやそうや。オトンがおらんからて、家の明かり暗くなったらかなわんで。

八重 ……心配して探しにきてくれたん。

剛志 そりや、急に居らんようになったら心配もするやろ。

八重 ごめんごめん。……エエ子やな、剛志は。

剛志 何、キッショイ事言うてんねん。

八重 ……。

間

八重 何わけの分からんこと言うてんの。

八重、剛志の冷たくなった手に息を吹きかけ、二人手を繋ぎながら去っていく。

去ると同時に、竜児がフラフラした足取りで公園にやってくる。ケガをしている様子。

兄が死んだ場所を、模倣するように寝転んでみる。

竜児 兄ちゃん、俺、正々堂々とヤツタで……。磯崎ボコボコにしたった……。うそや俺がボコボコや。……。痛いわ。……。正義は勝つって、ウソやな、力強いもんが勝つんやな。兄ちゃん、俺、悔しいわ、めっちゃ悔しいわ……。兄ちゃん、怖くなかったんか？落ちた時、痛なかったんか？兄ちゃん、死ぬんと生きるんとどっちが痛いんや。死んだら、幸せになれるんか？俺は生きるで、痛くても生きるで……。

溶暗

九

五〇三号室。

好江と高木が二人でババ抜きをしている。

高木 ……母は、弟の事があってから、外に出られへんようになりました。死にたい、死にたい、毎日そればかり繰り返すようになってしても。お医者さんに連れて行こうとしても、嫌がって言う事聞いてくれません……。僕も、もうほとほと疲れてて、弟は死んだ、けど僕は生きてる。なんで生きてる僕を見てくれへんのやろうって、母に腹を立ててました。それでも、母が死にたい言いだしたら、何時間も一緒に話しました。その夜も、もう何時間も話し合って、母も何となく落ち着いてくれたんです。でもその後、僕が少しようとうとしてる間に、逝ってしまいました。飛び降りでした。……僕だけが残されてしても、もうどうしてエエか分からへん言うかね。母と同じ状

かったことを、僕は初めて受けとめてもらえたんです。風ちゃんとも、その会で知り合ったんです。

好江 風子がなんて言うたか知らんけど、ウチのタクミは事故で死んだんやで。高木さんトコとは事情がちやうやろ。

高木 違わないですよ。風ちゃんは、お兄さんが自死したと思ってるんです。

好江 事故やて。

高木 お兄さん、飛び降りる意志があつたように見えたらしいんです。

好江 そう見えただけやろ。タクミは、そんな事する子ちやうんや。何回言ったら氣い済むんやろ。八年前も警察来た時、難儀したんや。

高木 (好江にババじゃないカードを抜かれる) あっそれは……。

好江 よっしゃ、ありがた!

高木 また負けかあ……。

好江 はい、千円。

高木、好江に千円を渡す。

高木 ね、お母さん。次、ババ抜きやなくて、ジジ抜きしません?

好江 エエよ。……自分、考えたな。

高木 やっぱ、僕、隠し事とか向いてないんですよね……。

好江 じゃあ、ジョーカーになるカード一枚抜いて、ここに置いて。

高木 はい。

カードの中から一枚抜いて、裏向きのまま、少し離れた場所に置く。

好江は、ジョーカーを除くカードを集めて、繰り、再び配布。

好江 風子、ちゃんと着いたんかな。

高木 大丈夫ですよ、もうこっち向かってんのとちやいますか。

好江 息子退院するのに、迎えに行かんかったら冷たい母親やて思われるやろか。

高木 そんなこと誰が思うんですか。

好江 今日、引越しやねんよ。

高木 好きかな。

好江 わからんの？

高木 ・ ・ ・寂しかったり、不安やから一緒に居りたいんかもしれません。それと好きとはまた違う気もするし、自分でもようわからないんです。

好江 もうシタン？

高木 えっ？いやいや、まさか。

好江 好きかどうか、やってみたらわかるて。

高木 やらんとわからんのでしょうか？

好江 「好き」とか、頭で考えるだけのもんちゃうて言うてんの。

高木 体で考えるものなんですか？

好江 せや。

高木 今度、機会があれば、ご意見、参考にさせていただきます。

好江 じゃあ、あの子、何の話したいん。

高木 え。

好江 あんたら結婚でもするんかと思ったのに。

高木 ……色々やと思います。お兄さんの話とか、

好江 今更タクミの事を掘り返してああだ、こうだ言うてもしやあないやん。

高木 しゃあなくないですよ。

好江 どうなる言うんよ。それでタクミが生き返るわけちゃうんやし。

高木 誰が悪いとか、何々のせいとか、風ちゃんはその話をしたいんやないんです。

好江 ほななによ。

高木 あの時の出来事を、お母さんと一緒に整理したいんやと思います。……身内や大事な人を自死とか不慮の事故で亡くした人は、死へのハードルが、人より低くなるて言われてます。死には引力がある。身近にそれを体験した人には、その引力が強く影響するんです。……あの鼻くそほじらんとマジメに聞いてください。

好江 私は、別にそんな引力とか感じたことないもん。

高木 お母さんはそうでも、風子さんや童児君は？童児君が専門学校やめてしまったんかて、喧嘩して大怪我したんかて、お兄さんの死と無関係と言いつれれますか？

好江 関係ないよ。あの子がへタレなだけや。

好江 私、もう、情けないわ。必死の思いで、産んで育ててきたのに。狂言自殺繰り返すやなんて恥ずかしい。根性腐ってるわ。

高木 狂言とかやなくて、そういうのリストカット症候群って呼ばれてます。生きてる実感が欲しいって、自分を傷をつける人もいます。自分に罰を与えようとして、傷を作る人もいます。風ちゃんもやりたくてやってるんじゃないんです。それだけ死の引力で強い。引力に負けないためには、物語しかない。僕はお兄さんの死を、家族でちゃんと語りあって、その家族なりの物語を作ってもらいたいって思うんです。

好江 なんよ、物語で。童話でも作ってお話せえとでも言うんか。

高木 物語いうんは、出会った死にどんな意味を見出すか、そしてどう生きていくかってビジョンをみつけることなんです……僕の場合、僕はこれから自死遺族のケアに関わっていったって、残された人たちの苦しみを少しでも和らげていきたい。それが僕の長いことかかってみつけた物語の結末なんです。

好江 なに言うてんのか全然わからんわ……私はな、十六で駆け落ちして、家出て、そこから、誰も頼りにせんと、一人で世間を渡ってきてん。仰山、辛い目にもおうた。調子のエエ大人に騙された。男にも逃げられたり利用されたりヒドイ目に会った。そんな中を、あの子ら抱えて、必死で生きてきた。辛あて、毎日どん底の生活やったけど、そんな、自分の命無駄にするようなこと、考えたこともなかった。……タクミかてそうや、放火の疑いくらいなんやっちゅうねん。もう誰も信じられへんやの、グチグチネチネチ弱音ばかり吐いて。何でそれくらい立派に仕事して見返してやれへんので言うたら、今度は生んだ私が悪い言うて、毎日、毎日責められた……高木さん、私の育て方が間違っと思ったんか？何をどうしたら、こんなことになんの？こんなんやったら、頑張らんと飢え死にしとった方がまだましや。私の人生返して欲しいわ。

風子と、あちこち絆創膏や包帯を巻いた竜児が入ってくる。

風子 ……ただいま。

高木 おかえりなさい。

風子 車、ありがとう。

好江、竜児につかみかかり張り倒す。

好江 このアホンだら。親に心配かけて、恥かかせて、ごめんなさいくらい言えんのかい。  
竜児 アイテテテテ、なにすんねん、ダボやめろや。

好江 ダボはお前じゃ、ゴメン言え、母さん心配かけてゴメンで謝らんかい。

風子 ちよう、母さん、やめてーや、竜児怪我しとんねんで。

好江 あんたもや。

風子 え。

高木 風ちゃん、ゴメン。お母さんに、言うてしもた。

好江は止めに入った風子の腕をとり、袖をたくし上げ、うでの傷を見ようとす。  
風子は必死で見せまいとする。

好江 見せ。

風子 嫌。

好江 見せたら見せ。

風子 嫌や、嫌、絶対、嫌。

高木 お母さん、ちよつと、ねえ。

だが、見てしまう。

好江 ……お前、親からもうた体に、何してんねん。

風子 私だってやりたくてやつとんちやう。

好江 訳のわからんこと抜かすな、自分でやつとんやろ、あんたの手、誰かが掴んで、切  
ってんのとちやうやろが、アホ、ドアホ、アホンダラ、ボケ、カス、ダボ、このうん  
こたれ、弱虫、毛虫、つまんで捨てる、馬鹿、変態、出ベソ、ぬか味噌頭……。

好江、思いつく限りの汚い言葉と共に、風子を殴る蹴る引きずり回す。  
止めに入った高木も、ついでに殴られ蹴られる。

動きの止まる好江。風子は、床で体を丸めている。

高木 風ちゃん？風ちゃん大丈夫か？

好江 私かて親なんじゃ。

高木 え、ええ。

好江 手加減して殴っとるわ。

高木 い、いやあ……。

長い無言。

好江 竜児、喉渴いた。お茶入れて。

竜児 嫌じゃ。

好江 なんやと。

高木 あ、僕、僕入れます。皆、ま、ま、座って、落ち着いて、ゆっくりね、暴力は無しでちゃんとお話ししましょう。

高木、風子をゆっくり起こしてあげる。風子、高木につかまりながら、

風子 母さん、私なあ、お兄ちゃんの事めっちゃ好きやってん。将来、お兄ちゃんと結婚しようって思ってた。……チューもしたことがある。

竜児 え。

風子 小さい頃な。

竜児 え、ああ……。

風子 そんなだけお兄ちゃんの事好きやったけど、やっぱり、布団に入ってこられた時は嫌やってん、怖かってん。

好江 いつの話や。

高木、風子から離れ、台所へ。

妹すら俺を信じてくれへんのかって、そんな寂しい笑い顔やった。それで、そのまま、向こう側に消えた……お兄ちゃん止められへんかった。私が、お兄ちゃん殺したも同然やねん。

好江 あんた、そんな風に思ってたん。

風子 ……うん。

好江 あんた私を呼んだん憶えてるか？

風子 え……。

好江 お母さん、お母さんも言うて、お兄ちゃんが、お兄ちゃんが、て……。

風子 呼んだん、聞こえてたん？

好江 死ぬんやったら死んでまえ、あの時、そう思ってた。腹立って腹立って……だから繕い物に気いとられてるフリしとったんや。でも心底あの子が憎かったんやない、あの子が死んだりするはずないって信用しとったんや。タクミ、死ぬて何回も言うてたけど、全部ホンキやなかった。かもて欲しいだけやった。あの子は、死ぬ気いなんかこれっぽっちも無かったんや

風子 違う、私は見てたんや、兄ちゃんはある時手すりに立ち上がって、自分で、

好江 あの子は、そんな子やない。

竜児 二人ともやめろや。……兄ちゃん、巢うを出たかってん。一人前になりたかってん。でも、玄関やのうて、こっち（ベランダ）選んだ。それだけなんや。

風子 え……。

竜児 ……お兄ちゃん、耳から血いでとったけど、それ以外は、フツウやった。寝てるみたいやった。顔、ちょっと笑ってた。寂しそうでもなかった。ビックリした顔もしとらへんかった。満足そうにしてた。せやから、せやから、せやから……。お姉ちゃんも母さんも、兄ちゃんも、きっと悪ない。誰も悪ない。兄ちゃんは、ここやないちゃうとこに行こう思だけなんやから。そこでちゃんとたどり着いたんや……多分。

高木、台所から、お茶の乗ったお盆を持って現れる。

高木 お茶入りました。トランプ、途中になっちゃいましたね……。

風子 母さん、片付けるよ。

好江 ……。



がおつてくれたら、ジョーカーから離れられるんです。もしそういうことを、みんながわかってたら、毎年、毎年、何万人もの人が死ななくて済むと、僕は思ってます。

好江 ……あのボヤ騒ぎで、あの子が疑われさせえへんかったら、あの子、ちゃんと会社務めして、結婚して、今頃、孫も生まれて、私、おばあちゃん言われてたかもしれへん……。別に孫なんか、うるさいだけやし、イランけど、そんなん、イランけど…。

空から、雪のように人形（ヒトガタ）の紙片が降ってくる。  
ベランダに向かう好江。

風子 母さん。

好江 タクミい……タクミい……ごめんなあ、タクミい……。

ベランダで、泣き崩れる好江。

心配そうに母に寄り添う風子と竜児。

三人を見つめる高木。

十

公園。井口と八重と剛志のお別れがなされている。

どこもここも、人形が降り積もる。すべての境界は曖昧になる。

終わって、また始まる